コワレモノ
〔Kowaremono:Risa〕
:璃沙
～家出娘と爛れた夏～

089タロー

原作・挿絵
よしろん
(サークル 鎖キャタピラ)

試し読み版

リアルドリーム文庫

Contents

目次

序章　Dangerous night（その日は唐突に）……4
一章　Risky stay（叔父の家）……6
二章　Play lingerie（破廉恥な撮影会）……57
三章　At home all day（大胆な男の来訪）……90
四章　Feel that something is missing（変わりつつある日常）……128
五章　Like to escape（狂う歯車）……161
六章　Foolish man（心地良い場所）……186
七章　Greedy pair（新しい関係）……216
終章　Never-ending days（続く非日常）……262

登場人物　*Characters*

皆川 璃沙
（みなかわ りさ）

東京都の私立学園に通う二年生。根は素直で真面目であるが、年相応の反発心と勝気な性格もあって親の躾に嫌気がさしている。スタイルの良さに自信のある美少女。

皆川 逸
（みなかわ まさる）

在宅プログラマーを職業とする璃沙の叔父。柔和な性格で幼少期の璃沙の面倒をみたこともある。中年とは思えないほどに精強で性に対して貪欲な一面を秘めている。

序章　Dangerous night（その日は唐突に）

男物のベッドの上で、少女は魔の手から逃れんと、小さく震え、身動ぎをした。
照明の落ちた薄暗い室内。衣類や雑誌やらが雑多に転がる生活感溢れた寝室。仕事部屋を兼ねた1DKは机とPC、ベッドの他にはまともな家具は本棚程度という空間。しわくちゃになった地味なシーツには独り暮らしの野暮ったさが滲み出、主が中年の男であると言葉なく物語っているかにも見える。
不思議と埃臭さは感じない小綺麗とも呼べぬ寝台に寝そべり、少女は後ろ手に縛られた手首を、どうにか外せないものかと試みた。
「あんまり暴れると痣になっちゃうよ。——璃沙ちゃん」
黒い陰影を帯びた両手が、ゆっくりと、抵抗を嘲笑うかのごとく迫ってくる。
少女は努めて怯えを見せぬよう睨みつけた。
どうにもならない。腕は拘束され口はテープで塞がれている。自由な両足は男の手にかかり、黒いソックスごと白い素肌をまさぐられていく。
腰は横ずれし視線を避けようと抵抗を続けるも、裾を捲られたスカートの奥では、淡い陰毛と薄い裂け目、微かに汗ばむ肉の土手が逃れようもなくその姿を晒す。

――見ないでよ、触んないでったら……！
舌の上で、無力な言葉だけがくぐもった音を立て、無為に転がる。
男の手は無遠慮に這（は）いずり、あえて陰部を避け、太腿と膝の上を動く。
予想だにしなかった危機に少女が慌て、もがく中、中年男からの陰湿な声が耳朶と脳髄を小さく震わせた。
「制服の上からじゃ分からなかったけど、立派に発育して……」
少女の肢体を爪先から頭まで舐めるように眺めた視線。その矛先が胸の膨らみでぴたりと止まる。
体格に見合うごつごつとした男の指が、ブラウスの襟にじりじりと伸びてくる。
嬲（なぶ）るかのような、弄（もてあそ）ぶかのような。乱暴でなくとも、それは凌辱者の魔の手に相違ない。
少女は――皆川（みなかわ）璃沙は、唐突に訪れた危機的状況に、十代後半の瑞々しい肌を薄く色づかせていった。
――こんなおっさんに、無理やり、なんて……！

一章　Risky stay（叔父の家）

「――なんだって？　もう一度言ってみなさい！」
「ウザいって言ったの。ほっといてよ」
「親に向かってなんて口を――待ちなさい、まだ話は済んでいない！」
朱の染み渡る夕暮れ時の住宅街に、男性と女性の剣呑な声音が響き渡った。
塀に囲われた白い一軒家。まだ新しい表札には「皆川」と刻まれている。
家主の性格の表れなのか、几帳面に整えられた玄関先。
そのドアを、乱暴に開け放ち出てくる一人の女がいた。
「どこへ行くんだこんな時間に⁉」
「どこだっていいでしょ！　父さんには関係ないし！」
女は振り返りもせず、ボストンバッグ一つを肩に、門扉を開いて路上に出る。
そして路面に当たり散らすかのように、ずかずかと乱暴に歩き出した。
（ムカつく、毎度毎度いちいち私のやることに口出しして！）
苛立ちも露わな歩調によって、黒髪をまとめたサイドアップが耳元で大きく揺れて動く。

女と言ってもまだ年若い少女であった。見た目や足取りに溢れる若さが現れており、何よりも服装が、都内にある学園の指定制服であった。
私立N学園に通う17歳の2年生。それが彼女、皆川璃沙の肩書であった。
明るく爽やかな面立ちをした、美しい容貌の少女である。頬や輪郭には多少あどけなさが垣間見えるも、つぶらな瞳と小ぶりな唇は年相応の女の麗しさを帯びていた。
物怖じしない性分は足取りのみでなく表情からも窺（うかが）い知れた。猫を思わせる小生意気そうな雰囲気が、若さと未熟さと愛らしさを主張している風でもあった。
もっとも、当の本人は憤懣やるかたなく、家路を歩く人々の前ですら膨れっ面を隠そうともしなかった。
(ちょっと泊まりに行っただけで誰のところだの男じゃないかだの。私の勝手じゃん。鬱陶しいったらないいし)
発端は実に些細な事と思う。一日程度の軽い外泊。たかがそれだけで父は目くじらを立て説教をしてきた。
多くの友人らが今を謳歌し様々な遊戯に手を出す中、自分だけは認められないという。自宅と学校と塾のみを行き来するなんとも窮屈でつまらない生活。それが父の、両親の求める我が子の有り様だった。
青春真っ盛りの璃沙からすれば、杓子定規な親の言葉など、ひたすら耳障りでしか

ない。
常日頃からうるさく言われ蓄積した鬱憤が爆発した今、しばらくは家に戻るものかと唾棄する心地で家を飛び出したのである。
無論、野宿する気などさらさらない。ＬＩＮＥで連絡を取り、遊び仲間らの家を代わる代わる泊まり歩く算段だった。
なんの事はない、誰もが皆やっている事である。プチ家出など特段珍しくもなければ大それた非行でもない、それが彼女らの共通認識なのだ。
が――返ってきたメッセージを見て璃沙は、自分の目算が甘かった事を知った。
「嘘……メグも。なんでよ、マジついてない……」
不運は重なるとよく言われるが、璃沙にとってまさにそれが今だった。心当たりは皆、各々の事情ゆえ宿泊許可を出せないとの事だった。
駅前をとぼとぼと歩きながら璃沙は途方に暮れた。Ｓｕｉｃａがあるため電車賃は問題ない。だが宿泊施設を借りられるほど懐は豊かではない。着の身着のままというほどではないが、半ば勢い任せの行動に過ぎずロクな準備もありはしないのだ。
どうしよ……と璃沙は呟き天を仰いだ。このままでは本当に野宿を余儀なくされる。いっそ駅構内でと考えはしたが見咎（とが）められぬはずがなく、さりとてのこのこと家に帰るにはプライドが邪魔をする。本気で遊んでいる連中は溜まり場で寝泊まりすると聞

くが、伝手(つて)もない上にそこまで出来る勇気はなかった。
彼氏にも頼んだが同じく無理との返答であった。野宿か、帰宅か。璃沙にとっては究極の選択を迫られた形だ。
と、そんな時である。親族なら、と考えたところで不意に思い浮かぶ顔があった。
「そっか、あの人のとこ行けばいいじゃん。電車で行けるとこだったはずだし一日くらいなんとかなるかも」
閃いたのは、父の兄である叔父の存在だった。最近は交流もなく滅多に顔を見ないが、同じ都内で独り暮らしをしていると耳にする事は幾度かあった。
歓迎されるかは定かでないが、自宅よりは遥かにマシであり唯一残った当てである。子供の頃みたく泣いてみせちゃえばなんとかなるでしょ。きっと。
璃沙は楽観的に捉え、即座に行動に移す事とした。
在来線に乗り電車に揺られる事30分ほど。都心からやや離れたベッドタウンの片隅に、目的の場所はあった。
さして立派ではなく、さりとて古びた安物件と言うほどでもない。最寄り駅から数分というところのこぢんまりとしたそのアパートが、叔父の住処だと記憶していた。
(そういや……もう帰ってるのかな。まだ家にいなかったりして)
すでに空は夕闇が帯を広げつつあったが、仕事帰りと思しき人々は今なお帰路を急

いでいた。叔父が未だ不在であってもなんら不思議はないと言える。
もっとゆっくり来ればよかった——今さらながらに気づき、璃沙は一応インターホンに指を伸ばし、押して鳴らす。
すると、じきに重々しい足音が近づいてきて、
「はいはい、どちら様？」
ガチャリと目の前のドアが開き、間延びした面立ちの眼鏡の男が顔を出した。
「あ、えっと、久しぶり……覚えて、る？」
璃沙は少々身を固くし、警戒心を抱かせないよう作り笑いをし小さく手を振った。
「私……璃沙。ほら、小さい頃よく遊んだ……」
「——璃沙、ちゃん？　ええっ、あの璃沙ちゃんかい？」
男はしばし眼鏡の奥で目を瞬かせ、表情を驚きに変えていった。
「そういえば確かに璃沙ちゃんだ……どうしたんだい急に？」
「ね、お願い。一晩だけでいいからさ、泊めてくれないかな？　——ここに」
根掘り葉掘り聞かれるよりかは、先に本題に入ってしまおう。璃沙は努めて可愛らしく顎（あご）の前で両手を合わせた。
「いろいろあってさ、ね、お願い叔父さん」
「あ、うん——はは、構わないよ」

「やった、ありがと叔父さん！」

　さすがに面食らった様子だったが叔父は快く承諾してくれた。璃沙はわざとらしいくらい無邪気に笑い、勧められるままアパートの一室へと足を踏み入れる。

(助かったぁ。親呼ぶとか言われたらシャレになんなかったもん)

　拍子抜けするほど容易く許可が出た事に、璃沙は安堵すると共に、世の中うまくいくものだと小さな不安を笑い飛ばす。

　独身の男の一人住まいに無警戒にあがりこむのは、相手が親族である事のみならず、この年代の若者にありがちな怖いもの知らずがゆえであろう。

　ともあれ璃沙は、これで今晩は問題ナッシング、と気楽に心中で笑う。

　――この選択が、大きな分岐点になるとも知らず。

　――叔父の視線が、自身の胸腰を舐めるように見ているとも気づかず。

※

「――でさー、成績あげろとかカレシと別れろとか……」

　叔父宅にあがりこんでから、はや1時間が経過していた。

　璃沙は叔父のベッドに座り、これまでの経緯を愚痴混じりに語っていた。

「門限まであってロクに遊べないし、干渉しすぎだってーの」

「で、家出してきたってわけかい？」

「そ」
夕食をもらい空腹感も遠退いたせいか、訪問時に比べて随分と口調が砕けている。カップ麺に惣菜という栄養もへったくれもない食事だったが、腹は膨れ口は軽くなりつつあった。
「でもマジで助かったー。友達もみんな実家だし、お金もないから行くアテなくってさ」
「最初誰だか分からなかったよ。何年ぶりだい？」
天然パーマ気味の短髪で線目の男が、太めの体躯（たいく）を揺するようにして笑いながらマグカップを差し出してくる。
皆川逸（まさる）。璃沙の父の兄であり、実家を出て独りで暮らす四十過ぎの中年の男である。記憶ではもう少し痩せていたはずだが、何年か会わぬ間にすっかり中年太りしたのだろう。お人好しそうな顔立ちそのままに頬にも肉がつき丸みを帯びていた。
身長はあるらしいが、大人しそうな雰囲気と鼻にかかったような声質が、厳しさとは無縁の無害な小男を連想させる。
１ＤＫの部屋は狭く、決して片付いてはいないものの、飾り気のない本棚や机、雑に置かれた私生活品が、独り暮らしの自由さを思わせ璃沙の目には羨ましく映った。
デスクチェアに座る叔父は、話を聞きながら終始にこにことした表情を崩さない。

「璃沙ちゃん随分と大人っぽくなったから、驚いたよ」
言われた璃沙は、曖昧な笑みで応えるに留める。
実際、昔とは別人のように変わっている。叔父が知る自分はまだ幼さの残る子供で、体型においても女らしいとは言い難かった。
今は違う。身長は伸び顔立ちは大人び、各部には適度な肉がついて胸腰には確かな膨らみがある。スタイルの良さには自信があり密かな自慢でもあった。
（じろじろ見てこないのはいいかも。クラスの男とかフツーにガン見してくるし）
その点は大人らしくて好感が持てた。あるいは遠慮しているのか、もしくはそういった視点を持たないのか。いずれにせよ気は楽だった。
「叔父さん、ずっと独身なわけ？」
多少の眠気を覚えながら璃沙が問うと、叔父は「ははは」と笑った。
「いやあ、ほぼ在宅勤務だからね。出会いがないんだよ」
「さみしー」
「はは、まあね」
叔父の態度に傷ついた様子は微塵（みじん）もない。
思えば昔もこんなやり取りがあった気がする。璃沙が幼い頃、叔父はまだ自宅で弟夫婦と同居しており、子供然とした無遠慮な姪相手に気分を害する事なく付き合って

くれたものだった。
　そんな叔父に懐いていた時分も確かにあった。父と違いおおらかな叔父は我がままを言おうとすべて許し、親に叱られ不貞腐れた際にはある種の避難所という役割を担っていた。
　率直に言えば、甘えていた。親でないだけに教育者目線を持たぬからだろうが、無条件で泣きつけただけに都合のいい人物だったのは間違いなかった。
　今ですら、親の悪口をいくら言おうが笑って聞いてくれている。「口うるさくない」というだけでも十分ありがたく、親に黙っていてくれる点も大いに助かる。璃沙の心中ではどこかで「御しやすい大人」というイメージが作られ、気を許すに足る要素となっていた。
「家でどんな仕事してるの？」
「プログラマー、かな。ＰＣとネットがあれば自宅で出来るからね」
「自由でいいなー。ウチの親そういうのダメって言いそうだけど」
「お父さんは堅実なのがいいって人だから」
「そーそー。ねー聞いてよ、私もＰＣ欲しいっていってんのにちっとも聞いてくれなくってさ――」
　久々に会った男相手に璃沙はここぞとばかりに愚痴を延々と漏らし続けた。記憶よ

り老けおっさん臭さは増したようだが、変わらぬおおらかさと優しさの前に璃沙の口は軽くなる一方だった。

父への反感、母への不満、荒唐無稽とも言える将来の展望と遊びたい盛りの若者の本音。

それらをひとしきりぶちまけた頃には、窓の外がすっかり闇色に染まっていた。

「おっと、もうこんな時間だ」

聞き役に回っていた叔父が笑顔を崩さず言う。

「疲れたでしょ。僕のベッド使っていいからね」

「ありがと」と告げ、璃沙は座っていたベッドにうつ伏せで身体を横たえた。愚痴るだけ愚痴って気が晴れたのか、睡魔は瞼を重くしつつあった。

欠伸を一つ漏らしつつ、璃沙は小さく独り言ちる。

「ウチの親も叔父さんくらい優しかったらいいのに……」

何気ないひと言は、叔父への好感というよりは、この場にいない親への当てつけであろう。

それを知ってか知らずか、叔父の逸はことさら嬉しそうに言った。

「璃沙ちゃんがよければ、好きなだけここにいても構わないよ」

——その台詞が耳に届く頃には、璃沙の意識は、早々と眠りの淵へと沈みつつあっ

た。

――カタカタ、カタカタ……。

※

沈黙の落ちた空間に、キーボードだけが乾いた音を立て続ける。照明の落とされた暗い室内には、横合いからのＰＣ画面の光のみがぼんやりと広がっている。

璃沙が――姪が寝入ってから、はや10分。いや、ようやく10分か――男は無言で打ち続けたキーから、静かに指を離した。椅子ごと振り返る。

愛用している飾り気のない寝台。安物のマット。しわくちゃなシーツ。最後に洗濯したのはいつだったかと、ふと些末な疑問が脳裏を過ぎる。

眼鏡の奥からじっと見つめる。あどけない表情で眠りについている可愛らしい少女の姿。空調のためか寝顔は穏やかで微かな寝息をすぅすぅと漏らし、横向きに寝転び枕に頭を置いている。

近づくと、ほのかに甘い見知らぬ体臭が漂ってくるようだった。柑橘類とミルクを混ぜ合わせたかのような、十代後半の乙女だけが持つなんとも香しい牝のにおい。

ドクドクと、うるさくなりつつある心音を聞かれそうで少し怖い。緊張している。

二十以上も歳の離れたまだ若い女学生相手に。
（璃沙ちゃん……久しぶりだけど、本当に綺麗になって……）
独り暮らしの男の家で無防備に眠ってしまうというのは、年頃ゆえの無警戒さゆえか、はたまた今時の子は皆そうなのか。
なんにせよ男は、久方ぶりに血の騒ぎを覚えた。
無音で手を伸ばし、そっとシーツを足側から捲る。
少女の腰から下が露出し、丈の短いスカートを穿く下肢のラインが明らかとなる。
覗かれるなどとは露ほどにも考えていないのだろう。膝を曲げた下半身はスカートが半ばまで捲れあがっており、純白の下着がモニタの光を受け、微かに青白く煌いて見えた。
これはすごい。華奢（きゃしゃ）な外見に騙されがちだが想像以上に肉がついている。ゆで卵のようにつるりとした肌や、尻から膝にかけての美しいカーブなど、どこをどう見ても成熟した女の身体そのものではないか。
知らず喉がゴクッと鳴る。汗が浮き出る。昔なら見向きもしなかったろうが、今、目の前に横たわる下肢は、もはや子供時代のそれではない。
様々な意味で久しぶりに、男は下半身が疼くのを感じた。
そっと手を伸ばし、触れる程度に太腿に添える。

直接指で感じた肌は、体温が高めでしっとりと温かい。滑らかな肌触りは繊細な絹か綿を思わせ、白く瑞々しい肌の光沢は白磁(はくじ)の彫刻を連想させた。
それだけでなく、軽く押すとぷりっとした感触が返ってくる。弾けるくらいの弾力感は二十代の女すら持ち得ぬ、もっとも躍動感に満ちた十代後半特有のものだ。
おお……と呟いた中年の男は、たちまち辛抱堪らなくなり両手でさわさわと太腿をまさぐった。瑞々しい弾力感と、指の間からもちっと溢れ出る豊かさと張りを併せ持つ肉感、肌理の細かな肌の感触に手指の神経をざわめかせる。
ん……と小さく声が漏れるも少女に目覚める気配はない。疲れているのだろう。ありがたい。姪の成長を確かめる心地で男は指を滑らせ、肌をむにむにと柔く揉む。
「すぅ……すぅ……ん、ぅ……」
寝息に再び声が混じり、露わな太腿が小さく擦(す)れあうも、やはり寝顔に大きな変化はなく、目覚めの兆候は見られない。
一方で肌には微かな変化が現れる。体温があがり滑る指に少し吸いつく。ほのかに汗ばむ柔らかな感触が掌いっぱいに伝わり、快感に類するものをただそれだけで与えてくる。
(この感覚、久々に味わう……もう何年も感じてない、紛れもない女の子の感触……)
触れるほどに柔らかさが伝わり、弾力と吸着の狭間で掌が、五指が躍る。白に限り

なく近い肌色。想像以上にむっちりとした太腿。見て感じるごとに劣情の熾火がちりちりと心奥で燃え広がる。

目覚めぬ事を幸いとし、男はさらに指を滑らせた。ショーツの純白に指先を触れさせ緩く揉む。サラサラとした絹の感触と、薄布を隔てた尻房の弾力が、ぷりりぷりりと揺れ弾むように指の腹を小気味良く押し返す。

男は鼓動の高鳴りを覚え、姪の尻の感触に浸った。あどけない寝顔と子供を思わせる柔らかな髪質。それに反して尻の肉付きは充実しており、腿から腰までのヒップラインは美しい丸みを帯び揉み応えがある。

以前会った頃と比べれば、とてもとても比較にならない。安産型とは言わぬまでも子を産むに十分な発育を経ており、背徳的な興奮と欲求が蝕むようにして意識を舐めていく。

触るだけで終わるなど勿体(もったい)ない――無意識に頬を笑みに緩め、男は指先を、ショーツの股部に触れさせた。

――スリ、スリ、グニ、グニ……。

右の親指で尻房を開き左の人差し指で陰部をこする。太腿や尻をまさぐったためか股ぐりはやや中央に寄り、尻と太腿のちょうど境目にきゅっと食いこむ形となっている。クロッチも例外ではなく陰部にぴたりと食いつき、ぷっくらと膨らむ肉の土手が

際立つ形となっていた。
　その肉土手の中央に触れると確かな割れ目の感触がある。微かに酸味の混じる体臭は尿と体液を織り交ぜたものだ。温かく、柔らかく、しかし侵入を拒むかのような儚い弾力と小さなヒクつきに、男は興奮し鼻息を荒くした。
「んっ……ふぅ……」
　少女からの反応の変化に劣情はさらなる加速を得る。触れれば分かる薄く走る溝の感触。その奥にあるほんのささやかな湿気と熱と、閉じ合わさろうとする太腿の仕草。すべてが興奮材料となり抵抗感を――そろそろ潮時だと囁く理性を、造作もなく削ぎ取っていく。
　ふと気づくと、しつこくまさぐる指の先にこれまでと違う熱気があった。覗きこむと、よくよく見なければ分からない程度にクロッチの中心が黒ずんでいる。内側に張りついたのか指を離そうとも溝の形が浮き出たままとなった。
　男は劣情に急かされるまま、ついにショーツそのものに指をかける。起こさぬよう慎重に。息を殺し。されど大胆にも白い布切れをするすると腰から抜き取る。
　布切れを手に一つ漏れるのは感嘆のため息。脱ぎたての下着は蒸したように温かく、汗と尿とその他を吸って生々しく解れている。中央にある小さなリボンとアクセント程度のフリルの飾りつけが、未熟な娘候に見え背徳感をなおのこと与えた。

知らず漏れるのは「むふ」という下品な含み笑い。さもありなん。これほど可愛らしいJKを相手に淫行の機会が巡ってくるなど、願ってもない幸運なのだから。
「ふぅ……スンスン、はァ……!」
鼻息を荒くし下卑た笑みを浮かべ、男はショーツに鼻を埋める。頬ずりをする。嗅覚に集中する。ズボンの前を硬くいきらせ興奮と喜悦に身震いする。
視線は目の前の少女の下肢へ。脱がせた際、姪は仰向けになっている。捲れあがったままのシーツとスカート。下着を失った腰は白い臀部(でんぶ)を丸裸とし、薄く茂った陰毛と共に、うっすらと割れた縦長の溝をも無自覚なまま晒していた。
遊んでいる風な言動だったが粘膜は美しい薄紅色である。ムダ毛処理もしているのだろう、余分な毛はなく白い肌とのコントラストが鮮やかだ。呼吸に合わせて裂け目は緩やかに開閉を繰り返し、わずかに漏れ出た内側の表面は小さな光沢を放っている。
予想を上回る興奮に男は身を乗り出し、自らもベッドによじ登った。
(璃沙ちゃん、おじさんもう我慢出来ないよ)
姪の腰を跨ぐ形で膝立ちとなり、いそいそとズボンの前を開ける。
勢い良く飛び出た分身は、とうに硬化し弧を描いて脈を打ち震えている。
――ここまでしていいのか、という思いは、なくはなかった。思いがけず年頃の美少女を自宅に泊める運びとなった。相手は姪、実弟の娘。間違いがあってはならぬ関

係だが異性と縁遠く暮らしてきた今、半裸で横たわる若い肢体はもはや目の毒と言ってよかった。

璃沙ちゃん、と無音で呟き、サオにショーツを巻き付けてしごく。アンモニアの混じるＪＫの体臭。掌に覚えた柔肌の温かさ。愛らしい寝顔に無防備な下半身、快いショーツの感触やそこに残る微かな体温。どれも欲望を煽るに十分でペニスはとうに直の刺激を欲し猛っていた。

眠っているＪＫの目の前で、パンツでオナニーし精液をぶっかける。なんと背徳的な話だろうか。久しくご無沙汰だったがゆえか下手な風俗などよりずっと興奮出来る。

璃沙ちゃん。おじさん本当は触りたくって仕方なかったんだよ。すぐにその可愛い寝顔におじさんの精子かけてあげるからね。

危険な状況にむしろ昂(たかぶ)り、男は、逸は夢中で肉棒をしごく。これが終われば姪は精液まみれのショーツを穿くのだろう。驚くだろうか。気づかないのかも。あるいは気づいても言い出せずに恥じらうだろうか。どうであれ見物であり、夢想するだけでなおさら肉棒は熱く脈を打つ。

激しい摩擦と興奮により尿道は潤いショーツに沁みを与えている。込みあげてくる熱い感覚。もうすぐだ、間もなく璃沙の愛らしい唇に白い欲望がぶちまけられる。

口端をあげ、来たるべき瞬間に思いを馳せ笑う逸。

――が、到達まであと十秒もない、という時だった。

「んン……。？　え……」

「⁉」

のめり込むあまりベッドを揺すりすぎたのか。

眠りこけていたはずの姪が、睫毛（まつげ）を震わせ、ゆっくりと瞼を開いた。

「……叔父……さん？」

逸はそれまでの笑みを消し、表情を硬くしていた。

※

「え……なに、してんの……」

目を覚ました璃沙は、恐る恐る身を起こしながら顔が青ざめるのを感じた。

心持ち下半身に寒気を覚え、寝ぼけた頭で何事かと思い、目を開いてみれば。

薄暗い部屋の中、叔父がすぐ間近で、剥き出しのペニスを握っているではないか。

よく見ると、そのペニスには見覚えのあるショーツが指と一緒に巻き付いている。

「！　それ……私の……」

璃沙は表情が強張るのを自覚した。

下半身の寒気の原因を悟る。叔父の手にある下着は自分のもの。その下着を手にペニスを握るという行為が何を意味するのか、解せぬほどに彼女は初心（うぶ）ではなかった。

「あ……こ、これはね、璃沙ちゃん――」
「まさか……脱がしてオナッてたわけ……？」
叔父は慌てて弁解しようとしたが、璃沙は込みあげる気色悪さのまま、震え声で罵った。
「マジでありえないんだけどッ！」
「違うんだよ、つい……出来心で……」
「っていうか返してよそれ！　変態ッ！」
――バシッ！
この期に及んで言い訳する姿がなおさら浅ましく思え、璃沙は伸ばされた手を振り払う。
その手は叔父の頬に当たり、平手打ちとなって眼鏡を弾き飛ばした。
意図しての暴力ではない、生理的嫌悪による勢いからの殴打。
が、璃沙はハッとした。慌て怯えた風だった叔父、その表情が、殴打をきっかけにふっと一変したのだ。
「………まったく。昔はもっと、大人しくて、可愛らしかったのに……」
璃沙はこの時、初めて目の前の男に恐怖を覚えた。あ、これマズい――生物学的に不利であるという女としての生理的危機感。それを今、生まれて初めて体感した。

「家出までする不良娘になって、おじさんも悲しいよ。――親に代わって、お仕置きしてあげないとなぁ」
　ＰＣを背にした逆光のためか、影になった男の表情が、開き直ったような笑みが、異様に不気味で恐ろしく見える。
　璃沙は動悸が速まるのを覚え、ぬっと伸びてきた両手から逃れんとした。
「……やだ、やめて……何すんの……っ」
　ベッドから降りて逃げようとするも、不思議と全身は強張ってしまい動きが鈍い。人間というものは恐怖すると動きが鈍化する、その事を初めて身をもって知った。
　叔父の力は想像よりもずっと強く、身体は見た目通り重かった。伸し掛かるようにされただけで満足に身動きが取れなくなり、腕を取られれば振り払う事すら出来ない。目覚めた直後の女の筋力は大の男相手に、あまりに無力であった。
　両腕を掴み後ろに捻り、脱ぎ捨ててあったネクタイを使って手首を後ろ手に縛りあげる。仰向けにし、罵声を浴びせようとする口には、粘着テープでぴたっと封をする。
　家出少女は程なく拘束され、罵倒すら許されぬまま再びベッドに寝転がされた。
「ん～！　ん、ン……！」
　離してよ、離して――言葉にならぬ罵声を浴びせかけ懸命に睨みつけるも、もはや璃沙には、なす術がなかった。

もがく程度しか出来ぬ身体に、叔父の両手が伸び、太腿をさわさわとまさぐってくる。

（やだ、嘘っ――こんなの……！）

こんな事になろうとは想像すらしなかった。お人好しな叔父さんに軽く泣きつき寝床を借りるだけ。ただそれだけで済むと思っていた。危険どころか対価すら考えていなかった。

人の好さそうな態度は、この時のための罠だったのか。仮にそうだとしても、今さら気づいたとて後の祭りである。

腿の内側をも撫で回されながら、璃沙は身動ぎくらいしか出来る事がなかった。

「綺麗な太腿だ、すべすべしてて堪らないよ」

足を開かせ、ことさらスカートの中をむき出しにしようとする叔父。

彼はじっくりと太腿の感触を堪能してから、今度は胸に手を伸ばしてくる。

「⁉　っ、ッ……！」

ブラウスのボタンが一つ一つ外され、襟ごと左右に開かれていく。ＰＣ画面の光に当てられ青白く輝く純白のブラジャーが、胸の膨らみごと露わとなる。

その下着姿を堪能する間も惜しいのか、叔父は両手でぐいとブラをたくし上げた。

「んうっ、んん……っ！」

「制服の上からじゃ分からなかったけど、立派に成長して……」

剥き出しにされた色白の乳房は叔父の言う通り確かに大きかった。84センチのEカップ。この年齢にしては少々出来すぎた発育のいい膨らみである。健康に気を使う性質ではないが、痩身な割に巨乳という点は璃沙の密かな自慢であった。

無論、若いため型崩れなどありはしない。見事な張りと肉感を併せ持つ、十分に誇れるヴォリュームあるバストだ。先端の色も綺麗で薄く、ピンク色が羨ましいと友人たちにも常日頃言われていた。

叔父もさぞかし気に入った様子で、無骨な両手で早速掴み、揉みしだいてきた。

(やだ、触らないでっ――嘘、ほんとに、するつもりなの……⁉)

ショーツを取られた程度で済んでいたのは、ある意味で幸運だったと言える。眠っている間に犯されたとて不思議でない状況だったと今なら考える事が出来る。

しかし、目覚めた事で状況は悪化し、かえってタガを外してしまったやもしれなかった。

「璃沙ちゃんは、身体だけは大人だなあ」

無遠慮に指を蠢かせながら叔父は興奮した声で言う。飢えていたのかまさぐる手つきは少し荒々しく、餅のように柔らかな肉をぐにぐにと不規則に変形させる。

璃沙にしてみれば、少し痛いくらいの愛撫だった。無骨な手指が節くれを這わせ無

防備な柔肌を弄ぶ。汚される、という感覚に、意識がこんがらがり身体が興奮状態へと進む。
火照ってくるのは決して感じているためではない――しかし叔父は、汗ばむ肌に気を良くしたのか谷間を寄せ合わせ、口を付けてきた。
――れろぉ、じゅるっ、じゅるるるっ……！
「んんっ、んっ、んン～っ！」
貪欲な本性を示すかのように叔父は乳首を両方同時に舐めてきた。
響くほど漏れる卑猥な音色。遠慮を知らない浅ましく蠢く舌と唇。揉み搾るような手指の動き、見る間に乳首を濡らす大量の唾液。
恥ずかしい。嫌だ。いやらしい舐め方しないでよ。キモいキモいキモいキモい。
胸中で必死に罵倒するも、感じたくないと思えば思うほど刺激はより深みを増してくる。嫌な思い出ほど強く記憶に刻まれるのと同じように。
――こんなおっさんに、無理やり、なんて……！
璃沙は、唐突に訪れた危機的状況に、十代後半の瑞々しい肌を薄く色づかせていった。
「ぢゅぷぢゅぷぢゅぷっ――はぁ……」
さんざっぱら弄んだ叔父は、ビクッ、ビクッ、と震える姿に満足した様子で乳房か

ら手を離した。
「さて、こっちはどうかな。ほら、見せてごらん」
「ん～～ぐんン～～！」
これで済むはずがないのだとしても璃沙はもがき、助かろうとする。
しかし所詮(しょせん)は無駄な抵抗に過ぎない。両膝を掴まれ左右に割られれば、あっけないほどに丸裸の恥部が剥き出しとなる。
「ああ、艶々としていてとても綺麗だねえ。おじさん生マ◯コは久しぶりだけど、まさか姪っ子のを拝めるなんて思わなかったよ」
これ見よがしに露わにされたのは薄紅色の女の溝である。透明感のある色合いは、使い始めてまだ日が浅い証拠であろう。ぴたりと閉じ合わさる隙間からは、わずかに覗く粘膜と共に、汗の混じった半透明の体液が滲み出ていた。
恥じらいを深める姪の仕草に叔父はあからさまな興奮を示し、両手の指先を溝にあてがうと左右に割り開いて拡張する。
(いや、そんなに広げないでよ……変態っ……！)
内側まで見られる感覚が羞恥心をより強く刺激した。指は続けざま円を描くよう小さく動き、ぱっくりと割れた溝の内壁をこすってくる。乱暴ではない、されど弄ぶかのごとき動きに、プライドさえもが踏みにじられてどうにかなってしまいそうだった。

呻き震えるしかない姪に、叔父は鼻を寄せ、淫唇から漂う体臭を思うまま吸いこむ。そしてそのまま舌を伸ばし、無防備となった内側の粘膜を、音を立てて舐め始めた。
「んん゛～～！　ん゛、ん゛、ンッ、ッ～～！」
粘着テープ越しに漏れる呻きに、いよいよ湿った音色が混ざり始める。
無理やりされて感じるわけがない――そんな考えが甘かった事を璃沙は思い知った。恐怖であれ屈辱であれ興奮には違いない。興奮すれば体温があがる。感覚は鋭くなり刺激に過敏化する。過敏化した神経は意識する場所に集中し、常以上に外的刺激を拾う。
その外的刺激が愛撫であれば、官能を拾ってしまうのも道理だった。経験はあるのだろう、舌の動きは迷いがなく強すぎない程度にまさぐってくる。気持ちいいか否かにかかわらず、敏感な粘膜は無作為に刺激を拾い集めてしまっていた。
（やだ、し、痺れて、きちゃう……アソコ、舐められて……じんじん、してぇ……！）
嫌悪し身を捩ろうとも、感覚は一層そこに集約し、かえって敏感になるばかりだった。そもそも女とは興奮の度合いで快楽指数に差が出る生き物である。不本意だろうが何だろうが興奮していれば身体は反応し、濡れた舌のざらつく感触を独りでに甘受し貪った。
「ちゅぷっ、ちゅぷっ、ちゅぷっ、ちゅぷっ――はあ」

５分もそうしていただろうか。あるいは１分か、はたまた２分か。混濁しつつある璃沙の頭では、すでに判然としない。
息があがり、全身にまで震えが来た頃に、叔父はようやっと口を離した。
「もう湿ってきた。若い子は感度がいいのかな」
叔父はことさら陰湿に言い、湿り気を帯びてヒクつく粘膜を挑発的に覗きこむ。続けて指を二本同時に入れ、粘膜の内側を焦らすようにして緩く掻き混ぜた。
新たな刺激に璃沙の腰が跳ね、知らず切なげに小さくくねる。
「それとも彼氏にいつもされてるせいなのかい？　ん？」
（う、うるさい、彼氏のことなんて、今言わないでよぉっ――ああっ！）
――ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅっぐちゅっ、ぐちゅぐちゅぐちゅ……！
指はリズミカルに膣壁をこすり、徐々に速度を増していった。粘っこい音がいよいよ漏れ出し、膣壁が細かく収縮を始める。呻き声は一段と高くなり、迫り来るものから逃れんと尻がシーツの上を滑る。
こちらの状況が分かっているのは笑みを見れば明白であった。分かっていて擦ってくる。節くれ立つ指で、弱い襞肉を。猟犬が獲物を追うがごとく崖っぷちまで追い詰めてくる。
（やめて、やめてやめてっ、激しくしないでぇっ――！）

やがて身体が硬直し始め足がぴーんと突っ張ってきた。汗の量が見る間に増え、肌は色づき頬は紅潮、唾液に濡れる胸の桃色が硬くしこり尖って震える。それがサインであると分かってはいたが、すでに退路はなく、璃沙にはどうしようもなかった。
「んっ、んっ、んんうっ～～！」
――ビク、ビク、ビク、ビクッ！
半裸の腰が自制を離れて一つ跳ね上がり、膝が痙攣し、背筋がぐぐっと捩れる。尻がしばし浮いたまま震え、薄紅色の淫唇から蜜の塊が漏れる感覚。
その状態で硬直し続け、シーツに腰が落ちた頃には、すっかり息があがり、身体中から力が抜けていた。
「ふーっふーっ、ふーっふーっ……！」
「ひょっとしてイッちゃったのかい？　ははは、クリも膨らんでるじゃないか」
叔父の笑声を聞き、璃沙は悔しい、と率直に思った。たかが前戯に過ぎないというのに、まして許可のない不愉快な行為に、こうまで反応させられるなんて。
絶頂感を覚えてしまうなんて。
「ん？　何か言いたいのかい璃沙ちゃん」
気が大きくなっているのだろうか。叔父の声には今やはっきりと余裕がある。
「じゃあ今、剥がしてあげるから。深夜だから騒がないでよ」

彼はそう言い、口に張った粘着テープのみを剥がしてくれた。
口がきけるようになった途端、璃沙は溜まりに溜まった不満を露わにする。
「……お願い、ほどいて。私……もう帰るから……」
甘く見すぎていた事は認めざるを得ない。自分が知る叔父は決して気の強い男ではなく、仮に目の前で誘惑されようと及び腰になるのが関の山だと思っていたのだ。
こんなおっさんにいいようにされるとか、嫌だしマジでムカつく。
璃沙はそう考え、ことさら突き放す態度を取った。
「んーそれは困るねえ」
叔父からの返答は、予想に反して強気な姿勢を崩さぬものだった。
「おじさんさっきから勃ちっぱなしでね。璃沙ちゃんが相手してくれないと」
「っ！　そんなの知らないしっ……したければ風俗でも行けば⁉」
叔父が再びペニスに触れるのを見て、璃沙は内心狼狽する。
隠すもののない剥き出しの男性器。大柄ゆえか、そのサイズは自分が知る中では群を抜いて大きい。びっしりと血管の浮くサオは禍々しくさえ目に映り、経験皆無な女の子ならば怖れを抱くほどだろう。
まさか本当に？　――顔と肉棒とを見比べ徐々に心音が速まる中、平静とも聞こえる叔父の声が耳朶に響く。

「そう。残念だなぁ。――だったら家に帰すわけにはいかないねぇ」
監禁でもするつもりなのか。頭がおかしいと璃沙は思い、切り札を切る心地で口早に告げる。
「そ、そんなことしたら、ウチの親が……」
「捜索願でも出すかい？」
「そうよ、叔父さん監禁罪で捕まるわよ！」
これを言えば必ず怖気付くはずだった。大人は犯罪という言葉に弱い、いざとなったらこれで脅迫出来ると、そのように仲間内で聞き及んでいた。
しかし叔父は予期せぬ返しで逆に足元を見てきた。
「で、その後どうなると思う？」
「……え？」
「家出した挙句、警察にまでご厄介になったら余計に帰りづらくなるんじゃない？　君の両親だって、これまで以上に干渉的になるだろうしねぇ」
「そ、そんな……」
「僕の言う通りにすれば、朝にはちゃあんと帰してあげるよ。――どうする？」
弱いところを突かれたと、璃沙は内心歯噛みした。
今現在とて散々辟易させられてきたのだ、これ以上親に口出しの口実を与えたくは

ない。頭の固い父のことだ、私生活どころか学園生活にまで干渉しかねない。この件が知れ渡れば学園側まで敵に回りかねなかった。
家出娘の頭脳が、十代後半の少ない経験から必死に打算を弾き出そうとする。
親バレ覚悟であくまで突っぱねるか。
一晩だけと割り切って我慢するか。
「……………よね」
唇を噛み締め俯きながら、璃沙は今出来る、精いっぱいの虚勢を張った。
「ゴム……ちゃんとつけてよね……」
「ああ。もちろん」
勝ち誇って見える笑みが、どうしようもなく恨めしい。
どうあれ従う他なかった。口うるさい親のもと、窮屈な学生生活を送るなどまっぴらごめんなのだから。
一回だけよ、ちょっとウリしたって思えばいいじゃない……。
たとえ虚しい弁解であろうとも、今はそう自分に言い聞かせる他なかった。
「じゃあ、いくよ璃沙ちゃん。ああ、本当に綺麗な生マ◯コだ……」
叔父はスラックスを脱ぎ捨て気忙しげに半透明のスキンを付けると、嬉しそうに口角を吊り上げ、肉の棒を淫唇にあてがった。

仰向けの璃沙が身を固くするも、その両足を左右に開き、ぐっと粘膜を割り裂いてくる。
「んっんぁあああ……っ！」
メリッと内側が軋みをあげるのを璃沙は確かに聞いたと思った。
押し入ってきた男の分身はやはり大きく、少しキツい。一度絶頂し濡れているとはいえ裂けるのではないかと不安になった。
そんな璃沙の心配を他所に、肉棒は思いの他スムーズに入った。
そして叔父が、嬉しそうな声を出しながら早速ピストンを開始する。
「おおお、久々のマ○コ、すごく気持ちいいよ……！」
「んンッあうぅ、ぐんンッ、んッ……！」
璃沙の口からも意図せず淫靡（いんび）な声が漏れる。いかに強がろうと身体の感度はあがったままであり、特に敏感な部位への刺激に無反応ではいられない。
（やだ、マジで、キクっ……大きいのが、出たり入ったり……！）
膣で感じると男根のサイズがより鮮明に理解出来た。太く長い異物感は、これまで想像した事がないほどの強い圧迫感を伴っている。初体験の時ですら、ここまでの感覚を覚えはしなかったと記憶していた。
正直を言うと少し苦しい。裂ける心配はなさそうだが、お腹の奥が膨らんでいるイ

メージがある。続けて平気なのかと思う。
が、漏れ出る声には官能が混じるのも実感していた。
(すご、いっ、私のアソコ……ビラビラ、全部捲れちゃいそうっ……！)
圧迫感が強いだけに密着度も相当なものなのだろうか。膣壁と擦れあう感覚は大きく、粘膜に張った神経組織が急激な勢いで熱をあげていく。ほんの1分か2分のピストン、たかがそれだけで腰全体まで熱く焼かれていきそうだった。
「ああ最高だよ……おじさんいつもオナニーで済ませてるから、璃沙ちゃんが来てくれてほんとに嬉しいよ」
困惑する璃沙を他所に、叔父は変わらず笑みを作っていた。その額には汗が浮き紅潮して見えるが、人畜無害に見えるその顔で気持ち良さげに腰を振る様が、璃沙にはなおさら腹立たしく思えた。
「んンッ、あううっ……こんな変態だって、知ってたら、ンうっ、来なかったのに……っ！」
せめてこれだけは言ってやらねばと途切れ途切れに罵ってやる。
「はっ、はっ……これでもおじさんは優しい方だよ、もし見知らぬ男の家に泊まってたら、もっと乱暴にされてたかもしれないでしょ」
「ンうっ、はぁ……か、勝手なことぉ……！」

「それに璃沙ちゃんだって、はっ、はっ、嫌がってる割には、おじさんのチンポでしっかり濡らしてるじゃないの」
叔父は少しずつペースをあげながら、ぬちゃぬちゃと卑猥な水音を立てる入り口付近に指で触れてくる。
（へ、変なこと言わないで、気持ち悪い……だけよ……っ！）
璃沙は必死に自分に言い聞かせ続けた。我慢よ我慢、こんなのすぐ終わるんだから、と。
だが抽送のペースがあがるにつれて、こちらの息もあがっていく一方だった。圧迫感の強いペニスは硬度とて若者に引けを取らず、むしろ膣内でなおのこと反り返り膣襞をしつこく擦りこんでくる。弱い部分、そうでない部分、それらまとめて擦過を繰り返し刺激の手を緩めない。感じるもんか、こんなの全然よ、そうは思うも肌は汗ばみ、下腹部には不可避の熱い官能が蓄積していった。
「ふぅ、ふぅ……どう？　おじさんと彼氏、どっちが気持ちいいのかな」
久々と言ったのは嘘ではないのだろう、叔父はリズムを小刻みに変えてうっとりした様子で呼吸を速めていく。
「はぁ、はぁ、っ……バッカじゃない、の……」
「女子高生はほんとに口が悪いねえ」

不意に叔父は左手を伸ばし、すでにじっとりと湿り気を含む淡い陰毛を摘んできた。
「あっああぁっ、いぃ、痛いぃ、ぁぁああっ！」
「おお、璃沙ちゃんはこういうのが好きなのかい。オマ◯コきゅうきゅう締めつけてくるよ……！」
軽い痛みを伴う感覚に璃沙は耐えられず腰を揺すって悶えた。弄ばれている、なのに罵倒すら満足に出来ない、その事に少なからず動揺しながら思わぬ官能の波に惑う。
（やだ、ち——違う……早く、早く、終わらせてぇ……！）
感じているなどと思いたくはない。痛みで感じてしまうなどと一瞬たりとて思われたくない。こんな中年男相手に乱れる姿など見られたくない。
しかし叔父の言う通り、陰部に走る微細な苦痛が官能の熱と織り交ぜられつつある。陰毛を引っ張られるたびピリピリとした電流が走り、それがかえって粘膜の感度をあげている。味わいたくないペニスの脈動を独りでに拾い膣洞を震わせる。声も一際甲高くなり、揺れ躍る乳首がますます尖るのが否応なく分かってしまう。
「はっ、はっ、はっはっはっ……！」
——ずちゅずちゅずちゅずちゅ、ズンッズンッズンッズンッ……！
膣壁の小刻みな収縮を受け、ペニスもさらに熱く脈打ち一層ペースをあげてきた。
濡れた粘膜は確かに肉棒を締めつけうねり、本人の意図とは別の意味で牡を果てさせ

ようとする。新たな蜜を零す膣襞は収縮に合わせて蠕動を行い、たとえ薄皮一枚越しにもぷりぷりとした弾力感を伝えていく。
「ん゛、んンンッ、あっあっ゛あッ゛あッあ゛あッ……！」
もはや璃沙には唇を噛んで声を押し殺す事しか出来ない。口を開けばきっと声が出てしまう。エッチな声、感じていると思しき声、そんなの絶対聞かれたくない、そんなのムカつく……！
そんな姪の耐え凌ぐ姿に叔父はますます興奮した様子で、ぐっと身を乗り出し覆い被さるようにして腰を振り立てる。
「はっはっはっはっ、お——おおっ……！」
——どぶりゅっ、ぶりゅりゅりゅりゅりゅううっ！
不意に腰が強く押しつけられ中で肉棒がびゅくびゅくと震え跳ねた。カリの先端がみるみる膨らみ新たな異物が生まれる感覚。璃沙にも分かった。膣内で射精が行われたのだ。
「はあ、はあ——おっと、しまった。璃沙ちゃんがあんまり締めるもんだから、つい……」
「ああっ、ああ゛あ゛あ゛あッ……！」
丸裸となった丸いヒップがぶるぶると痙攣し太腿を強張らせる。膣洞が狭まり無意

識に精液を搾り出そうとした。絶頂か、もしくはその一歩手前の反応。ぎゅっと目を瞑り上気しきった頬を逸らす。
牡の体重をその身に受けながら、璃沙は懸命にあらゆる反応を抑え込もうと念じ続けた。相手はイったが自分はイってなどいない、そう信じたかったたし、そうでなければ悔しくて仕方なかった。
1分ほども続いただろうか、長い射精をようやく終えて叔父はペニスをゆっくりと引き抜く。
上気し霞がかった意識で璃沙はそのペニスを見やる。溜まっていたのか単純に量が多いのか。スキンの先端に溜まった白濁は今まで見た中でもっとも多量だった。
叔父は保たせる気だったらしいが久々である事が仇となったのだろう。せめてもの抵抗として、早漏、と声に出せぬまま小さく罵倒する。
ともあれやっと終わったのだ、そう安堵し呼吸を整えようと努める。不本意であったが約束は果たした、早くシャワーを浴び一泊してからここを出ればいい。
が――「もう一戦いくかな」との独語を聞き、璃沙は耳を疑った。
「え……だって、もう……」
「別に一回だけとは言ってないでしょ。大丈夫、朝にはちゃんと帰してあげるから」
「っそんな……！」

叔父は使用済みスキンを捨て、新品のものを再度装着する。
一度果てた直後にもかかわらず、まるで萎える様子のない巨大な勃起ペニスへと。
そして手を伸ばし、乱れた制服をも剥ぎ取ると、脱げかけのブラのみを残した姪に今一度迫り、淫唇にカリを押しこんだ。
「嘘、こんな――んあ゛あ゛あ゛あッ！」
またしても読みが甘かった事を、璃沙は認識せざるを得なかった。

※

「んあっ、んあっ、ンッ、ふあっあ゛あッ……！」
ベッドに両手をつき、後背位の形で璃沙が喘ぐ。裸に近いその肢体は丸いヒップを背後から掴まれ、中年太りが目立つ男に腰を打ち付けられていた。
一度射精が行われてから、これで何戦目となるのだろうか。二戦目と三戦目はそのままベッドで、四戦目と五戦目は立位で、それ以後は――分からない、もう覚えていない。
なんにせよ叔父は様々な体位で犯してきた。その都度たっぷりと膣肉を擦り、スキンに精液を吐き出せば取り替え、それでも萎えぬ肉棒を捻じ込み、飽きる事なくまた犯した。
途中で何度も中止を訴えたが、「これで終わりなんて勿体ないよ」と叔父はやめる

その日はその一度きりで、後は適当に喋って終わった。

※

「あーもう、なにさ明宏のやつ！」
合鍵でがちゃりとドアを開けたのは、不貞腐れた表情の璃沙であった。
叔父宅に着いて早々、口汚く愚痴を零し、涼を求めて手早くエアコンのスイッチを入れる。その姿は私服で、ゆるふわ系のピンクのミニワンピースに薄手の白いシャツを重ね着した格好だ。夏場らしく襟元を開けた白い肌が際立つ姿だが、乱暴に靴を脱ぎ捨てる仕草には、可愛らしい見た目とは裏腹に険悪な苛立ちが見られた。
「そりゃ、練習で疲れてるのは分かるケド、だからって一発こっきりとか！　それも超テキトー、せっかく久々に会えたってのに」
昨日の情事を思い返せば、口から出るのは不満ばかり。
勝気で我がままな璃沙ではあるが、恋愛関係を円滑にしようとする程度の節度はある。
だからこそ昨日はあえて何も言いはしなかったが……。
「ぜんっぜん気持ち良くなかった。なんでよ……」
やっと素直にセックスを楽しめると思っていた。自他共に認める恋人同士なのだ、官能を隠さず遠慮なく没入出来るものだと。

にもかかわらず結果は散々なものだった。さして感じるわけでもなく一度としてアクメに至れなかった。まるで下手糞な素人相手に演技を強いられた心境だった。
否——本当は分かっている。明宏は普段通りであっただけだ。変わったのは恐らく自分。これまで満足出来ていたはずが出来なくなっていたのだ。
叔父のベッドに身を投げ出し、天井を見つめ考える。裾が捲れショーツが見えかかるも無人なため一顧だにしない。
この三週間ほどで見慣れつつある部屋。ここで何度叔父に犯されただろう。何度抱かれた事だろう。数える気にもなれはしないが、軽く見積もっても一回で二度三度とアクメに達している。それで数をこなすのだから達した総数は相当なものとなるだろう。
興奮度においても両者には雲泥の差があった。拒否を示しておきながらも、あのスリルに興奮を得たのは確かだ。彼氏との行為にはそれがまったくと言っていいほどなく、平々凡々で退屈とすら思えたほどだ。
一体いつの間に変わったのか。心当たりは無いとも有るとも言い難い。気づけばこうなっていたのだが、変化の兆しに無自覚だったとは断言出来なかった。
（っ——なんであの人の事考えちゃうのよ、いなくてせいせいしてるってのに……）
脳裏に浮かぶ光景を消す事は存外に難しかった。身体が飢えている。あれをよこせ

と訴えている。足りないと嘆いている。
苛立ち紛れに傍らの枕を拳の甲でばふっと殴る。
男の独り身にありがちな、さほど洗っていない枕である。皺の寄ったカバーからは小さな埃が舞い上がり、陽の光に透けながらふわふわと中空を漂った。
今度文句言って洗濯させよう。そう思った矢先、璃沙はふと、微かなにおいを覚えた。
(あ——これ、あの人の……)
即座に分かる。最近嗅ぎ慣れてきた独特の体臭。加齢臭が混じり始めており、あまり好きではなかったもの。
なんとなく。特に意味はなく、枕に鼻を寄せにおいを嗅ぐ。少し酸味のある恐らくは汗のにおい。今でも決して良好なものとは言い難い。
だというのに璃沙は、急に身体が疼き、熱を帯びてくるのを感じた。
(なんでよ、ちっともいいにおいじゃないのに、嗅ぐの、やめられなく……頭、ふわふわしてきて……)
今また揺り起こされるのは、つい先日まで続いていた、この部屋での記憶である。
嫌というほど肌をまさぐられ気色悪さに身震いした日。
時間をかけた執拗な愛撫に辛さすら覚えるほど敏感になった日。

未体験の羞恥に苛まれ濡れたくなくとも濡れてしまった日。
そのすべてで自分は官能を得た。絶頂を経て、さらに絶頂した。一夜かけて抱かれるという事をここで初めて体感した。
同等の官能を彼氏相手にも期待した。だが無理だった。彼氏とあの人は違うという事も、やはりこの場所、このベッドの上で知ったのだ。
沸々と込みあげるものに耐えかね、躊躇いながらも枕を腕に抱く。ぷぅんと漂う加齢臭が再び鼻腔の奥底を突き、言葉以上の某かを牝の本能に訴えかけてくる。
（ヤバ、私……したく、なってきちゃって……）
とうに初潮を迎えた身体である、己が内の変調など訝る事なく分かろうというもの。熱と疼きがその前兆である事は疑いがなかった。
身体を横向け太腿同士を小さく擦り合わす。素足の付け根の奥、陰部はまだ濡れてはいないが、欲情の種火は確かに熱を宿している。鼻で呼吸しにおいを吸うごとにそれが大きくなるのが分かる。
きゅっと唇を噛み眉間に皺を寄せた。あり得ない。あの人のベッドで自慰をするなんて。あろうことか、その人の体臭で発情するなんて……。
しかしいくら否定しようと一度そこに欲望を認めれば身体は自然と流されていった。淫らな記憶とそこにまつわる異性の体臭。その二つはセットとなり胸を焦がす熾火と

化した。繰り返し抱かれよがる己を次々と思い出させていく。妄想が徐々に下腹を疼かせ、胎の内に切なさを募らせていく。
そして璃沙は視線を上に向けた際、偶然というものの恐ろしさを知った。ローターであった。電動式で有線型のピンク色の淫らな玩具が、ベッドボードのラックに置いてあるのを発見したのだ。
最初に持った感想は呆れであった。恐らく使うために準備してあったのだろう。嫌がられるのは考えるまでもなく分かるだろうに。
続いて胸に抱いた感情は、少しの躊躇と、大きな好奇心だった。
（どうしよう、アソコ熱くなってきてるし、でも……）
危険な領域に踏み込みつつあるのをなんとはなしに自覚する。これはある種の罠だ、手を伸ばしてしまえば泥沼に嵌まるに違いない。
その一方で疼きは強くなるばかりであった。枕のにおいが鼻腔を侵食し意識に薄い靄をかけている。発情時特有の無軌道な欲求が冷静さを奪いつつある。
（っ——ちょっとだけ……ちょっとくらいなら……どうせ誰もいないんだし……）
生憎と生来から我慢強い方ではない。自己弁護の精神がむくむくと首をもたげ始め、しばし迷ったが結局は手に取っていた。
興味を持ったのは、この手の代物に触れた経験がないからだ。スイッチ等は見れば

即分かり使用方法も大まかには知っているため、記憶を頼りに準備を整え、仰向けに変わり、ワンピースの裾を捲って淡いブルーのショーツを露わにする。
　どれほどの刺激があるか知れぬため、まずは直接触れるのを避け、ショーツの布越しに楕円形の玩具を押し当てる。
　そしてスイッチをオンにした途端、玩具はヴヴヴと振動を開始し、
「あはぁッ、はぁン……！」
　璃沙はぴくりと腰を反応させ、膣口に走った未知の感覚に甘い声音を漏らしてしまった。
（ヤバ、これ結構クるかもっ……アソコの奥まで結構ぶるぶる来て……！）
　設定は最弱であったが伝わる振動は決して弱くは感じなかった。むしろ強すぎたと思う。感じやすい部位だったのかもしれない。
　なんにせよ璃沙は早くも膣口が甘く痺れつつあるのを実感した。手指の愛撫とはかなり違う、小刻みな振動が入り口を擦り粘膜の内にまで響いてくる。すでに熱く疼いていたため振動だけでも想像以上の刺激をもたらした。
　とはいえ高みに至るほどではない。絶頂を欲する肉体にとっては未だ物足りなさがある。
　ならばとクロッチにぐっと押し当て上下に緩くさすってみると、これまた新たな官

能が訪れ、知らず腰がぴくぴくと震え躍った。
「あはぁッ、ンンッ、いいのぉ、アソコ、じんじんしてきちゃ、う……！」
指や唇ほど激しさはないが、一定のリズムを刻む振動は思った以上に膣に快い。入り口が擦れ奥が微震える。布越しに小さく割れ目を這いずる。発情した身体に確かな刺激と官能が広がっていく。
璃沙はいけないと思いながらも、たちまち行為に没入していった。他人の家で自慰をするなど間違いなく非常識である。部屋主を思えばなおさらと言えよう。彼氏を連れ込んでの行為ですら本来あり得ぬものだった。
されど今さら止められぬ事も事前に分かってはいた。一度火が付いた女の身体は易々と鎮まるものではない。もっと、もっとと続けるうちに、感覚はより鋭敏化し貪欲に快楽を欲していくのだ。
「はぁ、はぁあッ、気持ち良くなっちゃう、もっと欲しくなって、ちょ、直接じゃない、と……もう……」
鎮まらぬ欲望は欲望を呼び、今ある官能のさらにその先をと浅ましく懇願を始める。
わずか数分刺激しただけでクロッチには薄く沁みが出来ていた。脱いだ方が汚れずに済み今よりもっと気持ち良くなれる、そう理屈をつけ空いた方の手でショーツをするすると丸めて脱がす。

そうして剥き出しとなったヴァギナに再びローターを押しつけると、より鮮明となった振動に璃沙は思わず内股となった。
「だめ、ヤバいこれぇっ、クるっ――クリ擦れて、一気にクるっ……！」
再度横倒しとなり身体がくの字に折れ曲がった。これほど感じるとは思っておらずなんの対処もしていないため、薄く開いた桃色のヴァギナから蜜が垂れてシーツを汚した。
快楽に打ち震えヒクつく腰は、嵌まっていく事に怯えるがごとく時折引き下がろうとする。が、指がそれを許さない。ローターを押しつけぐぐっと裂け目の隙間に潜り込ませる。内側の粘膜への直の刺激に腰はまたもぴくぴくと震え悶える。
みるみる迫り来る絶頂感に璃沙ははあはあと息を乱した。予想通り、粘膜の奥は熱い欲望でじっとりと潤っている。止まらぬ振動に膣襞が震え蜜がくちゃくちゃと攪拌(かくはん)されて、子宮口付近の襞の波たちは忙しないうねりを始めている。あと少しでも深くまで埋めれば膣壁が歓喜し咥えこんでしまうだろう。
鼻先にある枕の存在も快楽に拍車をかけていた。臭いはずの体臭が昂るにつれて甘美に思え、目を閉じ浸れば叔父に抱かれている気分となった。
そう、すぐ傍にあの男がいて悶える自分を見下ろしていたら。いやらしい顔で笑っていたら。そう思うだけで感度はなおあがり、首筋を這うような興奮がやってくる。

（やだ、あの目っ――あの目で見られてると思うと、ムカつくのに身体、どんどんっ……！）

一体いつの頃からだろうか。腹立たしいはずの男の態度に得も言われぬ高揚を覚え始めたのは。分からない。分からないが分かる事もある。それは、自分の中に被虐的な顔が存在しているという事実。

冗談じゃないと思いながらも身体は着実に悦楽の階段を駆けあがっていった。膣に渦巻く甘い痺れが腰を忙しなくカクつかせ、枕に埋まる鼻はふうふうと息を荒らげ、頬は紅潮し、衣服の中で乳首はぷっくりと勃起していき、

――ガチャリ。バタン。

「っっ⁉⁉」

あと少しというところで、璃沙は口から心臓が飛び出そうになった。

玄関だ。ドアの開閉音が確かに耳に入ったのだ。

鍵はかけてあったのだから入ってこられるのは自分を除けば部屋主だけである。帰ってきたのだ、あの男が。あれこれ考えるより先に大至急着衣を戻しにかかる。

足音が迫り来るまでの間、わずか十数秒。

男が顔を出した時には、璃沙は一見普通の装いでベッドに浅く腰かけていた。

「は、早かったじゃない、もっと遅いかと思ってた」

叔父の逸は「ただいま」と言ったきり、にこにこといつもの笑顔を浮かべていた。
璃沙は努めて平静を装う。大丈夫、裾は戻したし外からでは見えないはず。ショーツを穿く暇はなかったがポケットに押しこんである。隙を見てトイレにでも行けばすべて解決するだろう。
が——そんな浅はかな目論みは、いともあっけなく崩れ去った。
「困るなあ璃沙ちゃん、部屋を使っていいとは言ったけど、オナニーまでしていいなんて言った覚えはないよ」
「な、なんのこと？　っていうか、そんなコトするワケ……！」
「じゃあ、これは何かなあ？」
「あッ……！」
叔父の手が背後に伸びたかと思うと、隠して置いてあったローターのスイッチが握られていた。
「これ、おじさんのだよねえ。それがどうして璃沙ちゃんのオマ◯コに入ってるのかなあ？」
「それは、ぐ、偶ぜ——きゃッ……！」
言い終えるより先に太腿に手が伸び、ベッドに腰かけた体勢のまま左右に開かれ、がに股にされた。

璃沙は堪らず羞恥に口籠る。裾を捲られ露わとなった剥き出しの淫唇。桃色に輝くその入り口はすでに蜜でしとどに濡れ、浅い部分ではピンクのローターがコードを垂らして咥えこまれていた。

これで言い逃れなど出来ようはずもなく、頬は赤らみ悔しげに歯が軋る。

そんな姪の表情を、叔父は愉快そうに眼鏡の奥から眺めた。

「枕のにおいにも興奮してたよね？　おじさんの枕くんくんしてたからねぇ」

「な、そんなコトするワケっ……！」

「彼氏君とのセックスじゃ物足りなかったのかなあ？　あんなに淡泊じゃ当然かもしれないけどねぇ」

「なっ——なんで、そんなコトまでっ……⁉」

璃沙が驚愕のあまり誤魔化す事すら出来ずにいると、叔父はニヤリと笑い、ＰＣを手早く立ちあげた。

映し出された画面を見て、璃沙は心底仰天した。

どのようにしたかは知れないが、録画映像には自分と明宏の姿があった。二人がこの部屋で何を話し何を行ったか、一部始終を克明に表示していた。

「盗撮——したのね⁉　信じらんない、サイテー！」

「おじさんがいない間、璃沙ちゃんがどうしてるか見たかったんだよ。まさか彼氏を

連れ込んでセックスまでするなんてねぇ。こっそりカメラを設置した甲斐があったよ」
叔父は笑みを濃くし、面白いネタが手に入ったと言わんばかりに迫ってくる。
「さっきのオナニーももちろん録画してあるよ。こっちのスマホでも確認出来たからね。――いけない子だなあ、ちょっと目を離しただけですぐムラムラしちゃうなんてねぇ」
「ち、違う、私そんなじゃ――あはぁンッ……！」
睨みつけようとした璃沙は、しかし甘い声をあげベッドに背を預けた。膣内に入ったままの玩具が再び振動を始めたのだ。
「だめ、やめてったらぁ、ンンッ、電源止め、てぇ……ぁあッ……！」
再度訪れた甘い官能に身体はあっけなく膝を折った。先ほどは絶頂寸前だったのだ、あと少しというところで寸止めにしてしまった。その影響が如実に身体に出てしまったのだ。
「もう奥までぬるぬるじゃないか。イク寸前だったのかな。本当にエッチな子だなぁ璃沙ちゃんは」
「はぁはぁ、うるさいぃ、変態、変態ぃ……ッ！」
込みあげる官能は喉を震わせ罵倒の声すら淫らにしてしまう。どこまでも卑怯で卑猥な叔父に反感こそ抱くものの、同時にこのシチュエーションに燃えてしまう己がい

る。弱みを握られいいように弄ばれる自分。そこに興奮を得つつある状況に我が事ながら狼狽する。

「前から思ってたけど、璃沙ちゃんは苛められるのも好きみたいだねえ。お尻叩かれても感じてたみたいだから」

叔父は言って、ひくひくと震える姪の身体をうつ伏せにして膝を立たせた。次いで両手をベルトで後ろ手に縛り、今回は足首も拘束する。

そしてネクタイを両目に巻き付け、視界さえをも奪った。

「な、なにすんのよ、これじゃ見えないっ……！」

「こうする方がもっと興奮するはずだよ。ほぉら、こうやって動かすと……」

持ち上げたままの尻に手が触れ、コードがくいっと引っ張られた。

振動する玩具が膣内でずれ、粘膜がぶるぶると掻き乱されて、

「あッ゛あ゛あ゛あッッ！」

璃沙は淫らに腰をくねらせ歓喜の声をあげてしまった。

「はぁはぁ、やだ抜いてぇッ、じんじんする、あッ゛あ゛あ怖い、怖いぃッ……！」

悔しい事に叔父の言う通りであった。手も足も動かず視界すらない、その上で恥部を視姦し責められるという心境は、肌すべての感覚を研ぎ澄ませ、感度をひと回り鋭敏にした。

膣の感度があがったせいか、少しローターが動いただけでも嫌と言うほどそれと分かる。見えないだけに想像が掻き立てられ、今にも再び動くのではないかと不安すら覚える。緊張感に手足が震え、肌には次々と汗珠が浮いていく。

その緊張感が快楽と比例するのは、きっと気のせいなどではない。現にしばし放置されると官能と同時に強い疼きが膣肉を熱くする。

そこへ指がずぶっと押し入ると、振動と摩擦が深くまで浸透し腰が快感にぶるぶるとわななないた。

「あッあッ奥まで、だめ来てるうぅッ！」

「オマ〇コがぎゅうっと食い締めてくるよ。おじさん指が食い千切られちゃいそうだ」

玩具もそうだが指の節くれとて十分な刺激となり得た。ずりずりと無遠慮に膣襞を擦る太くて無骨な指の関節。微細な振動と異なるそれは、疼きを溜めた膣粘膜に新鮮な快感を広げていく。

璃沙はがちがちと歯を鳴らし、激しい羞恥と屈辱感と、子宮にまで染み渡る愉悦に震えた。

認めたくない。認めたくないが身体は確かに認めていた。この快楽、この昂りこそ自分が求めていたものだ。他事など一切忘れ去って今一瞬のみに心震わせたい、刹那の興奮を心ゆくまで噛み締めたいのだ、と。

これを求め彼氏と寝たが得られたものは一つとてなかった。ここにはそれがある、怖いほど興奮し悔しいほどに感じている、その事実が意識の中で幾度も弾け閃光をもたらす。

しかもこれだけで済ませるほど叔父は生易しくない。ローターのパワーを徐々にあげて刺激を強くしてくる。高まる官能に璃沙が悶え「だめッ、だめッ！」と叫ぶごとに、被虐心を煽るかのごとくからかいを交えた声をかけてくる。

「まだまだどんどん濡れてくるねえ。いやらしいお肉が目に見えてひくひくしてるよ。ああすごい、お豆もぷっくりと膨らんでるねえ」

「はぁはぁうるさいぃ、いやらしいコト言わな――んあ゛あ゛あ゛あ゛あッッ！」

――ヴヴヴヴヴヴヴヴ！

――じゅるっじゅるっじゅるっじゅるるっ！

振動はいよいよ強にまで達し膣奥を大胆に攪拌してきた。同時にクリトリスに唇が張りつき豪快な音を立ててしゃぶる。責め立ててくる。

璃沙もとうとう尻を振って浅ましいほど乱れ喘いだ。初体験の斬新な官能は腸（はらわた）が震えるほど刺激的だった。知らず縛られた手足がバタつき痛みを覚えてくるほどに。

そして、その上でなお焦らしてくるのが、この中年男なのである。

再びスイッチを弱に切り替え指もぬぷっと引き抜くと、今まさに達する寸前であっ

た姪に向けて言ってくる。
「困るなぁ璃沙ちゃん、おじさんはちっとも気持ち良くないのに自分一人だけイキそうだなんて」
「はぁっはぁっ、ど、どぉして――あとちょっと、なのにぃ……ッ！」
未だ悔しさは残っているのに出てくる言葉は紛れもなく哀願であった。これで二度焦らされた形だ、いい加減我慢の限界だった。
それを承知でやるのだから本当にこの男は底意地が悪い。拘束がなければ蹴りつけていたやもしれない。
「そんなこと言ってもおじさんだって見てるだけじゃ退屈だよ。せめて璃沙ちゃんがしてくれたらねえ」
「っ――分かった、わよ……すればいいんでしょ、口で……！」
鼻先にペニスが迫った事は見えずともにおいで分かった。何度も咥えた牡臭い男根だ。カリのサイズすら体感として覚えている。
この太長い勃起に埋め尽くされたい、込みあげた熱をあと一歩押し上げてほしい、そう願う欲望が怒りを押し退け口を大きく開かせる。
「は、早くしてよ、口開けたままだと辛いんだから……」
「それじゃお言葉に甘えてと。――おお、最初からぱっくりいったねえ」

目いっぱい開いた唇の中に自らのカリがすっぽり入ると、叔父は楽しそうに腰を軽く前に押し出した。
「口の中もびしょ濡れじゃないか。やっぱり璃沙ちゃんは苛められる方が感じるねぇ」
ふざけた台詞に苛立ちがないではなかったものの、生憎と璃沙には余裕などなかった。口内に広がる苦みと臭みが不思議と今は恋しさを呼び、一刻も早く入れてもらおうと一心に舌を蠢かせていった。
(大きい、ぶっとい先っぽ口ん中いっぱいに……でもほしい、これがほしいの、私のアソコ、オマ○コん中、これでいっぱい掻き回してほしい……！)
なぜこうもと思うほどに欲望が沸々と内から込みあげる。決して美味でなく大きすぎて咥えにくい。それでもこの逞(たくま)しい男根からどうにも心が離れない。膣肉が求めてやまない。
じゅるじゅると音を立て、しきりに首を振りカリをしごく。鈴口から滲み出るカウパー液を舌でこそぎ取り嚥下する。夏の暑さに蒸れた鎌首にも入念に舌を這わせ刺激する。
思えばこの技術もすべてこの男が教えたものだ。一般女性はそう易々とフェラチオなど行わない。お遊び程度の経験ならあったが、こうまでやれるようになるとは思わなかった。

「ああ、気持ちいいよ璃沙ちゃん……そう、上手だねえ。おじさんもしたくなっちゃうよ」
叔父はうっとりした声音で言いながら、ローターのパワーを再び強に変えてきた。
「んむ゛む゛むッ⁉　ん゛ん゛ん゛う゛う゛んッッ！」
突如勢いを増した振動に膣肉は撹拌されぶるぶるとわななく。驚き尻を揺すり立てるも、自らの手でどうにかなる刺激ではない。わずかに冷めかけていた淫熱が急速に再燃し蜜が溢れ出た。
「んむ゛むッんぐッ〜〜はあっはあっだめえ、またクる、いいのクるッ、もうちょっとで私ぃ――――！」
「もうイキそうなのかい？　しょうがない子だねえ」
叔父はまたしてもパワーを弱め、あと一歩のところで三度(みたび)焦らした。
姪の身体を仰向けに変え、足首の拘束を解き、目隠しは残したまま濡れた膣孔からローターを引き抜く。
「さあ、次はどうしてほしいんだい？　言ってごらん璃沙ちゃん」
「っっ――――ほ、ほし、ぃ……な、中、に……」
ぷるぷると震える璃沙の口から、懇願めいたか細い声が途切れ途切れに漏れてくる。
「声が小さいなあ。大きな声で言ってくれないと、おじさん聞き取れないよ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/